



初めての国際会議発表～CAP2018に参加して～

鴨部麻衣（京都大学理学研究科附属花山天文台）

1. はじめに

筆者は京都大学理学研究科附属花山天文台で技能補佐員として勤務しており、日々の観測業務や見学対応などを行っている。国際会議には、これまでサポートスタッフとして関わることはあったが、自分が発表者として参加するのはこのCAP2018が初めてであった。普段、狭いコミュニティ内で仕事が完結してしまう、まさに“井の中の蛙”状態の日々だが、今回初めて世界各地から集まった方々と出会う“大海”に飛び込むことになった。

2. 講演、参加者の発表から

この国際会議が、“Communication”をテーマにしており、参加者それぞれが、天文学を伝えたい、自国での取り組みを伝えたい、という溢れる気持ちを思い思いの手法で表現していた。天文学を伝える方法には五感を通して感じられるあらゆる手段が可能だということを改めて実感した。音楽、ファッション、アニメ、歴史、茶道、和菓子、手話、点字、模型、VR などなど。きっとまだ誰もやっていない“表現”があるのだろう。それが何なのか、自分への今後の宿題となった。

2日目午前の東大カブリIPMUの村山斉さんの講演[1]では、冒頭で「天文学者でもない、サイエンスコミュニケーターでもないのに、なぜ自分がここにいるの??」と笑いを誘い、スライドには「Mr.イ○クレディブル」や「ス○ーウォーズ」など人気映画をオマージュした画像が登場し、聴衆を惹きつけていた。「アウトリーチで目指すこと（My goal in outreach）」として、「上質のエンターテインメントであること、教えるのではなく、心を捉えること、聴衆が2つか3つのメッセージを

覚えて帰ること」というコンセプトを伝えてくださった。

3. ハンディを乗り越える

ハンディを乗り越えた人として印象に残ったのは、ワンダ・ディアズ・メルセド（Wanda Diaz Merced）さんである。彼女は、まだ学生だった20代前半で視力を失ったが、光度曲線を可聴化する技術により、ガンマ線バーストの研究者として活躍されている[2]。彼女についてはTED talkの映像がインターネット上で視聴できるので、興味ある方はご覧いただきたい。

国際会議において、多くの日本人にとっては、言語が大きな壁となるが、多くの参加者が「伝えたい」という意欲、工夫と努力によってそのハンディを乗り越えていた。

「伝えたい」思いが溢れる発表の一つが、3日目午後Lab3での茶木恵子さんの発表だった[3]。日本天文愛好者連絡会（JAAA）での取り組みを熱く語り、星形の指し棒（ポインター）やキャラクターの等身大パネルが登場して、会場を沸かせていた。“宇宙に行きたいパフォーマー”のニアム・ショー（Niamh Shaw）さんがツイッター[4]で「大好きなプレゼンテーション」とつぶやいていた。（彼女は真っ先に「その星形のポインターはどこで手に入るの?」と質問していた。）3日目午後のLab3は、言葉や国境を越えて、笑いと涙を共有する会場になっていた。（発表でもらい泣きしたのも初めて!）

4. 自分の発表

CAP2018では“Let's Make our Butterfly Diagram!”というタイトルで発表した。

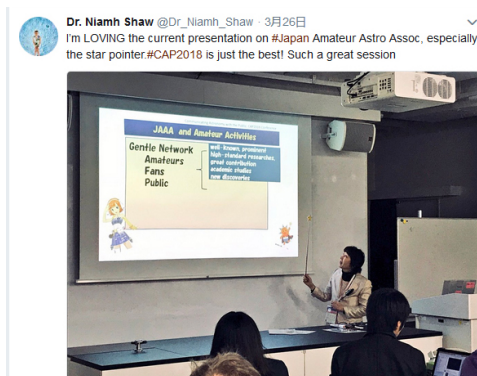


図1 ニアム・ショーさんのツイッターより

花山天文台では1997年から太陽のH α 観測を、2004年からスケッチによる黒点観測を定常的にやっている。また、2013年からは京都市教育委員会との連携事業として、毎年700人を超える小学生の見学を受け入れている。見学に訪れる子どもたちと花山天文台の観測を結びつけることができないか、ということで、2014年からは「みんなで作るバタフライダイアグラム」という取り組みを実施している。[5]

この取り組みは、見学に訪れる一人一人に、花山天文台で観測された黒点の緯度と発生年月が記入されたカードを配布し、そのデータに基づき大きなグラフ用紙にシールを貼ってもらって太陽黒点の発生緯度の長期的な変化を表す「バタフライダイアグラム」を作ってもらおう、というものである。観測者や研究者の疑似体験を通して、太陽の謎を知るためには長期的な観測が不可欠であることを実感してほしい、というねらいや参加した子どもたちからのコメントを紹介した。

発表が最終日の最後から2番目という順番だったため、会期中ずっと緊張感があり、毎日夕食もそこそこに、ホテルの部屋で準備や練習に励んでいた。(体力的にも結構ハードな日々だった。)

発表後には、“I like your activity!”と声を

掛けてくださった方がおられ、名刺交換ができた。国内に限らず、海外の方からもこのような反応があったことは大変嬉しいことであり、発表してよかったと思える瞬間であった。

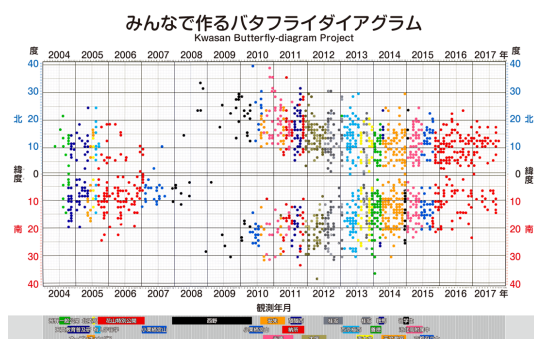


図2 「みんなで作るバタフライダイアグラム」2017年版

5. おわりに

“井の中の蛙”が大海に飛び込み溺れそうになりながらも、国内外の方々と交流できたのは、貴重な経験であった。また、アジア諸国の女子学生たちが活き活きと発表していた姿も印象的だった。彼女たちの活躍が楽しみである。自分もまた、もがきながらもスキルアップができればと願っている。LOCの皆様並びにご指導いただいた宇宙物理学教室の野上准教授にこの場を借りてお礼申し上げます。

文 献

- [1] Hitoshi Murayama, K3, CAP2018
- [2] Wanda Diaz Merced, K2, CAP2018
- [3] Keiko Chaki, “Amateur Activities and Public Outreach by JAAA”, U6, CAP2018
- [4] https://twitter.com/dr_niamh_shaw
- [5] 鴨部麻衣(2017)「みんなで作るバタフライダイアグラム」,第31回天文教育研究会,2017年天文教育普及研究会年会集録

鴨部麻衣